

映画「美味しいごはん」への想い



Film director
Interview

編集 奥田啓太

1984年広島県生まれ。日活芸術学院卒業後、映画「GANTZ」やドラマ「33分探偵」などに助監督として携わり2011年映像制作会社に入社。「Starbucks Coffee」「P&G」などの大手企業映像や、「CALLAWAY APPAREL」「LOUNIE」といったアパレル系の店頭映像なども制作。2016年1月「株式会社ぶんちん」を立ち上げ、自ら撮影編集を行うビデオグラファーとして活動中。

プロモーションビデオや大手企業映像など数多く手掛け、実力派映像ディレクターとして業界で注目される奥田啓太。本作の製作にあたり、東京から「ゆにわ」のある楠葉に拠点まで移した。その一大決心の裏にある、本作への並々ならぬ想いに迫った。

Q この映画を撮ることになったきっかけは？

いつも私が仕事でお世話になっていたアートディレクターの千原徹也さんに、ちこさんを紹介していただいたのがきっかけでした。ちこさんが映像作品を作りたいということで相談を受けたのですが、最初、僕はアドバイスを求められているだけだと思っていました。皆さんの熱い話を聞きながらも、どこか他人事と思っていたら僕が編集する、という話で驚きました(笑)。

Q 映画の撮影を始めて想像と違ったことは？

最初は戸惑いながら参加していましたが、2回目いきなり田んぼの撮影だったんですが、そこで農家さんの話を聞いて泣いてしまって(笑)自分の感情がこんなに早く傾いたのには驚きました。奥さんは食事に気を遣っていました。が、この頃の僕はぜんぜん無頓着で、よく奥さんに怒られているくらいだったんです。

Q そこからどう関わったんですか？

たいな状態でした。

でもゆにわでは、「何を食べるか」だけでなく、「誰と」どんな場所で「食べるか」も重要なんだと聞きました。だから1週間の撮影が終わったらかく子どもとごはんを食べようと思ったんです。それでみんなで「いただきます」と「ごちそうさま」をするようにしました。そうしたら「食べるの楽しい」と子どもが言ったんです。食べ方ってこんなに大事だったんだ、子どもたちに教えられました。

Q 東京から楠葉へ引越しを決意した理由は？

「毎日、ゆにわのごはんを食べたい、家族に食べさせたい」と思ったんです。ゆにわって村みたいなんです。色んな人がいて、皆ができることを持ち寄っている。そんな暮らしに憧れを感じていたら、ちこさんに「来ちゃいなよ」と言われて(笑)必要とされるのが嬉しかったのもありますね。

Q ごはんには人生を変える「ひかり」があると思いませんか？

ゆにわの食器の業者さんと話をしました。いわく「何でも磨けば光る」。ちゃんと掃除が行き届いている店とそうじゃないお店が同じ料理を出しても、人が「美味しい」と感じるのには必ず磨かれているお店なんです。これを聞いてしっくりきました。ゆにわのごはんは意識を最後まで向けて磨いているんです。だからそこに光が生まれる。「光」だと抽象的だから、僕には分かりづらかった。でも『掃除して磨かれている店と放置されている店なら、人はきれいな

僕は当時、東京に住んでいました。ちこさんは大阪なので、会うのは月に2、3回のイベント撮影だけ。けれど、ちこさんとの距離を感じていて、1年間この熱量で追いかけるのは面白くないと思いました。ドキュメンタリーなんだから、僕はもっと色んなちこさんを撮りたいかった。だから7月くらいに1週間、密着取材させて貰いました。日常を追ううちに、ちこさんがカメラを意識しなくなっ、色んな姿や表情が撮れるようになりました。

Q ゆにわに来て食生活は変わった？

以前は、仕事のストレスが溜まったら、一気にポテチを5袋食べていたこともありましたが(笑)。でも、ちこさんに密着した1週間で、すごく変わりましたね。この間、毎日ゆにわのごはんを食べたんです。すると、ものすごくごはんが美味しい！

ゆにわのごはんって、一口食べて感動で泣く人と、食べ続けることで良さを感じる人との2通りあると思います。僕は完全に後者。5日目くらいにはめっちゃ元気になっていて、ごはんを食べることが待ち遠しいと思う自分に気づきました。

Q 密着取材の前後で食に対する印象はどう変わりました？

東京時代は、忙しくて子どもとごはんを食べていなかったんです。

家には奥さんと子ども2人だけ。毎日奥さんは子どもの夕食を先にぱっと作って、子どもは2人だけで先に食べる、みな方を自然と選ぶ」と言われたら、そうだなあと思いました。ごはんも意識を向けるだけでエネルギーがこもる。みんなでおいしいと思って食べるから光が生まれる、と僕は解釈しています。

Q 映画公開を目前にして伝えたいことは？

『食べ方を変えると生き方が変わる』というのを広めることで、僕たちは世界を変えようとしています。映画に関わっている人は皆本気です。僕ら製作者だけだと、まだ世界を変えるだけの力はないかもしれない。だけどこうして僕たちの映画に関心を持ってくれた人が『食べる・生きる』ということに関心向け始めてくれたら、世界はきっと変えられる。

そのためにも『誰でもできる方法』ってのが大事になってきます。『添加物をとらない』のも大事ですが、まずは意識を変えることから。「ごはんとは、“いのち”をいただくこと」と意識するだけで、うちの子どもはころっと変わったから、大人も変わると思います。

この映画をたくさんの方に見て頂いて、可能性を感じて欲しい。

僕、自分で言うのも何ですが、東京では結構仕事を持っていました。だけど楠葉にも引越したし、今はこの映画に全力で向き合いたい。それくらい、使命を感じているから。この映画を心打つものにし、みんなが食に対して意識を向けられるきっかけにしたいいけない、と思っています。それくらいの期待感、ここ楠葉に渦巻いているんです。この小さな町から、僕たちは世界を変えますよ。

世界を変える映画を撮る。ある時から、そう決めましたんです。

だったら自分の人生も変えないと真実は映せないと思った。

